

# 巻 頭 言

学校長 高 桑 康 雄

本校の紀要も数えて25巻、年刊として4半世紀を閲したことになる。毎年のように研究の業績を積み重ねていることは、本校教職員の努力の結晶として注目されてよいものであろう。

本校が教育学部附属学校として、研究をその本来のしごとの一部として学校を運営していくにあたって、研究部は活動の組織化と推進との中心的役割を担うものと考えられてきた。この研究部を中心に、従来から全教官がそれぞれの希望に従ってグループに分かれ、研究の実績を深めてきたのである。

グループの構成ならびにその具体的な研究課題は年ごとに変化してきているが、大枠は数年来継続的に設定されているものである。本巻においては、授業研究、生徒指導に関する研究、総合学習の研究の3つのグループから報告がなされている。

授業研究グループからは宮田教諭の「学力差を考慮した英語の指導」の研究実践が発表されたのであるが、入学者の選抜にあたって抽選制を大幅に採用している本校では、学力差、とりわけ英語の学力差についての課題は決して小さいものではない。本稿はその点に対するひとつの試みといってよかろう。

このような学力差に応ずる英語教育の方法についての工夫は、たとえば県下にもLLを用い、生徒の学力に適合したテープを数種類用意することによって、低学力の生徒の水準を高めることに成功している高校の例などもあり、これらを参考にしながらなお今後工夫すべきところもあるが、宮田教諭の研究も注目されてよいと思われる。

生徒指導に関する研究では、米山、斉藤両教諭による「中学生・高校生の図書館利用の実態と問題点」の報告がなされている。今日子どもたちをとりまく文化環境はテレビを中心とした映像メディアがきわめて有力であり、それだけに子どもたちの図書に親しむ機会は相対的に減少しているといわざるをえない。各種の生活時間調査もこのことを明らかに示している。しかし、学校が生徒の身近にさまざまな図書を整備し、その利用を促すならば、生徒のメディア接触の様態は変化させるものと考えられるし、またバランスのとれた文化環境を形成するという点からもそれは望ましいことである。本校が図書館の整備に努め、その利用に

力を注いできているのもそうした意図によるものといえるが、その活動の一環として、利用の実態が調査され報告されたものである。生徒の生活の一端とその問題点をそこにとらえることができるという意味で味読してほしい。

総合学習の研究としては、「総合学習の場としての高校の研究旅行」と題する徳井、田中、白井、山田、服部の5教官による報告が提出された。総合学習とはいかなるものであるか、についての詳細は同論文にゆずるとして、このグループの研究は本校が実施している高校2年生に対する研究旅行を、教科をこえた主題への総合的な取り組みの場として構成しようとした試みの報告である。昨秋実施されたこの旅行は山口(秋芳洞・秋吉台)、萩、広島、大久野島を訪れたが、とくに広島に焦点化して、「ヒロシマ」を学習の素材としようとしたのがこの報告である。学校における修学旅行(さまざまな名称で呼ばれているが)の意義をどこにおくかは議論の分かれるところであろうが、いずれにしてもそこには総合化されたひとつの生活経験がある。それを明確な教育的意図にもとづいて組織化し教材として位置づけることはおおいに意味のあることであろう。その点でこのグループ(昨年度高2研究旅行に引率同行した教官グループ)の報告はひとつの問題提起となっていると考えられる。

さて、以上3つのグループの研究はそれぞれ、今日の中等教育における一課題を追究したものであるが、その報告作成の過程で、研究グループの共同研究の実があがり、形としては個人の労作のようではあるが、実質はそれぞれのグループの討議・検討を経てまとめられたものであると確信している。

しかし、これらグループ別の研究の具体的な課題としてはこの他にも重要ないくつかが残されていることは否定できない。授業研究のグループにしても、特定の1教科の問題をとりあげるだけでなく、各教科にそれぞれ内在する課題、たとえば、各教科での評価の観点をどう設定するか、生徒の参加を促すための工夫をどうするか、教師の発問と生徒の反応との関連をどうつかむか、効果的な指導のための教材・教具の工夫と活用の方法はどうか、といった問題に、まだまだ広がりをもちうるであろう。生徒指導の問題にしても、

中・高併設校における中学生の指導上の問題、学級集団組織化のうえでの諸問題とその解決に向けての指導、生徒会の組織化と自治能力の育成の問題、校内コミュニケーション（新聞・放送等）のあり方をめぐる問題などを考えることができる。

これらの問題については、すでに研究が重ねられ、既刊の本紀要で論及されたものもある。しかし、実践的な研究はつねに新しい問題にくりかえしくりかえし直面しつつ進められていくものであり、その意味から、今日再びとりあげられてよい問題もあるであろう。

本年は10月下旬に通常3年ごとに開催される研究協議会が予定されている。今回は教科指導中心ということで、公開授業や分科会討議が予定されているが、そうした機会のためにも、本紀要掲載の「教科の研究」に属する諸論稿は意味があると考えられる。一々ふれることはしないが、お読みいただき、御批判をいただければ幸いである。

研究協議会のように直接公開して御批判を仰ぐ場合

はもとより、すべて研究発表というものは多くの心理的抵抗をともなうものがある。研究紀要に論文を執筆するというのもその最たるものと言わざるをえないであろう。

しかし、このような機会を通じて教官ひとりひとりが自らの見解と実践——教材をどうみるか、生徒をどうとらえるか、どのように教育のしごとを組み立て、生徒を取組むか、といったことを表出することは、それによって、自らをふりかえる契機となるところに第1の意味があるのではないだろうか。また第2は、「Looking out is looking in」ということばがあるように、みなが表現したところのものを見、かつ学ぶことによって自らを育てる相互作用のあることも知らなければなるまい。

いま、本校教官がまとめあげ、吐露した論文が、そうした相互に学びあうきっかけとして役立てられれば幸いである。